

【小松左京氏追悼エッセイ】「向こうのホームに」

機本伸司

昼下がりの東京駅で、「のぞみ」に乗り込んだとする。指定券を確かめながら、独り、座席に腰を下ろす。あとはもう、何も考える必要はないだろう。寝ていても、目的地である新大阪に到着するのだから。そう思つてシートを倒しかけた、その時――。

もし向かい側のホームに、知人の姿を見かけたとすれば、あなたならどうするだろうか？　そしてそれが、小松左京先生だったとすれば……。

発車時刻は、間近に迫っている。今降りて先生のところまで行けば、ご挨拶するだけでも、手元の座席指定券は無効になつてしまふだろうし、その後の予定も狂つてしまふかもしれない。じつと座つてさえいけば目的地に到着する列車に乗っていないながら、それを降りるといふのは、馬鹿げたことだと言ふしかない。既定の路線を捨ててまで、わざわざリスクを選ぶことはないだろう。しかし向こうにいらつしやるのは、あの小松左京先生だ。さて、どうするか……。

実はそんな経験が、僕にはあつたのだ。確か五、六年前のことだったと思う。

いや、そうした経験は、その時が最初ではなかったのかもしれない――。

SFは、子供のころから大好きだった。それを仕事にしたいという気持ちも、ずっとあった。けど、なかなか踏ん切りがつかなかったのである。平凡でもそこそこ安定した人生を過ごしているうちに、いつの間にか四十を過ぎていた。

それがとうとう、思い切って仕事を辞め、親にも黙って小説を書き始めた。そのきっかけの一つになったのは、小松先生のお言葉だった。

「SFという表現形式は、巨大にして永遠のテーマに立ち向かえる“武器”なのである――」

それから三年あまり、貯金も底をつき、もう駄目だとあきらめかけていたとき、ようやく吉報が届いた。昔から何も取り柄がなかった僕にとって、生まれて初めていただく賞――それが小松左京賞だったのである。

受賞のご挨拶として、僕は先生のお言葉を引用し、「ずっしりと重いその“武器”の感触を、自分の右手に感じ始めたところ」と書かせていただいた。

その重みは、今、さらに増している。しかし強力な武器であることに、依然変わりはないのである。それをどのように使うのか、どこかで先生に見守られながら、試されているような気がしてならないのだ――。

さて、ホームで小松先生のお姿をお見かけした僕が、その時どうしたのかだが……。  
それはもう、言うまでもないだろう。